

李朝末期の詩人金笠と旅

曹 咏梅

一 はじめに

金笠（キムサッカッ）は李朝末期の放浪詩人である。放浪といえはすぐ金笠を思い出すほど、朝鮮民族の人にとってはあまりにも有名な詩人である。笠は韓国語でサッカッという。彼が放浪した時にいつも笠をかぶったので、世の人は「キムサッカッ」と呼んだといわれる。

実は金笠については朝鮮末期の文献に僅かに記録されている程度で、彼自身は詩集などを残していない。だが、全国を放浪しながら各地に数多くの詩を残したため、民間には彼の逸話や詩がたくさん伝わっている。その逸話や詩を採集して初めて出版されたものが李応洙氏の『金笠詩集』である。李応洙氏は同書で金笠の伝記大略を次のように紹介している。

- ・丁卯年（1807）三月十三日出生
- ・六歳の時金益淳逢変
- ・二十二歳の時長男翬均出生
- ・同じく二十二歳の時家出
- ・二十四歳のとき一時家に帰る。その後再び家出、次男翼均出生。
- ・癸亥年（1863）三月二十九日、全羅道同福にて別世、享年五十七歳。⁽¹⁾

金笠は生涯放浪の生活を送り全羅道で客死したといわれるが、実際の足取り、滞在地、旅の実態などは殆どわかっていないのである。金笠にまつわる逸話も多く伝わっているが、ここでは同時代の文献と残された作品から、金笠の旅について考える。金笠は金剛山の詩を多く残し、同時代の文献『緑此集』には毎年金剛山に行くところある。金剛山は古くから景勝地でありながら、仏教の聖地でもある。本稿では、この金剛山の旅に焦点をあてて、金笠と旅の関係を考えてみたい。

二 文献記録から見る金笠

金笠が放浪の旅に出た動機、彼にとって旅とは一体何であったかを考える際、手がかりとなるのは同時代の文献記録と残された詩しかない。李応洙氏は『金笠詩集』で金笠を記録した同時代の文献『大東奇聞』、『海東詩選』、『大東詩選』、『緑此集』、『海蔵集』を紹介している。『海東詩選』には金笠の「入金剛」の詩が収録されており、『大東詩選』には金笠の「咏笠」の詩が収録されているという。『大東奇聞』、『緑此集』、『海蔵集』は金笠の伝記を記したものである。

①『大東奇聞』

金炳淵 安東人 其祖益淳 以宣川府使 純祖壬申 降於西賊洪景来 遂伏誅 其家因為廢族
炳淵自以謂天地間罪人 嘗戴冠不敢仰天 故世以金笠稱号⁽²⁾

【金炳淵は安東の人で、その祖父益淳が宣川府使であった純祖十一年、平安道の賊洪景来に降伏したので、遂に誅殺された。その家これによって廢族されたために、炳淵みずから天下の罪人だと

いって、笠をかぶり敢えて天を仰ぎ見ることがなかった。それゆえに世の中の人は金笠と呼んだ。】

②黄五『緑此集』「金笠笠伝」

金笠笠者 東海上人也 金 其氏 笠 以頭上所着者 言也

【金笠笠という人は江原道の人で、金がその姓で、笠をかぶっていたからそう呼んだ。】

③申錫愚『海蔵集』「金臺笠伝」

記金臺笠事 壬子

近有一詩人如癡如狂 擁袒褐躡芒屨 面垢不洗 竭來畿湖關東間 為詩多警拔為科体詩益精工 人不厭其來 來輒以盤飧供 止其宿 以強韻硬題難之 步押平安 篇章円活 随呼随応 略不經意 以是声名太噪 只言其姓 又以其喜載臺笠故 呼為金臺笠 余於東遊 亦嘗見所為詩村塾間 冠童津津説其事 誦其詩 如隔歳古人 又或手繙其詩 奉為繩尺 又有言其人 常遊場屋 或作詩数十篇 或不作一篇而出 其狂如此 又無所用財故 人不敢以焉援 於白戰臨科場益痛飲無醒 皆畿湖關東人士之所醜也 場外酒肆 亦愛其名而怕其狂乎 酒輒盪來亦不敢索錢 寒暑常挂白衿衣 或以新綿製衣以贈則亦不辭 摺卷其所着衿衣 担肩行遇路上寒凍者 脱身上綿衣而給之 復着所担之衿衣 風雪栗冽而不顧 蟻蝨磊落而不憚也 余之光恠其人久矣 無以其名字 里居不欲詳扣 蓋以所伝不在於字名里居也 今春病鬱來遊清涼寺 李樂峰尚祐適自郊居來會 命韻賦詩問余曰「君知金臺笠乎」曰「聞其名久矣」樂峰曰「龍仁村家 適值其來宿 見其擊鉢為詩 試与之語 自言 少日力為詩文 遊京師為進取計 日下詩人名士 莫不相愛而爾 就中安福卿膺壽 申士綴錫禧 名冠同士 与我交益厚 獎翊甚重 余亦恃之為喜 後知余氏族為広州郷品 見待浸薄 自從時不容於此兩人 無以附尾而揚名 憂鬱不樂 遂至癡狂乃落魄不遇 放倒自恣 余之病 福卿士綴為之崇也 仍歎曰 公州半刺 集賢校理 今俱貴人也 不可見矣 其居曰広州 其名曰金臺云」【中略】今聞其行止荒忽無定 其詩 亦雖瞻給而欠端庄 奇警而少典雅 可知其病不痊而才下士者也 何嘗以氏族之單寒而薄之也 此而鳴之病 不在見薄而在於億其見薄也 然而使而鳴終始客福卿交士綴 名揚詩社 所就能幾何也 未必使畿湖關東誦其詩而愛慕不已 若恐不得見面 及見其人而驚喜恟恟 競具酒食而留之 惟恐或去 如今日之為也 士之播名於世固非一道而鳴之名於是播矣 又何恨乎 福卿士綴之待之薄也 余既記金臺笠事 將以遍遺畿湖關東 而鳴所嘗往來之處 欲使而鳴一讀而平其心易其氣 霍然認然 作七発之広陵濤

壬子初春 申錫愚記

【金臺笠のことについて記す 壬子年（一八五二年）

近頃、一人の詩人がいるが、愚かで狂ったように見える。古びた衣服に藁ぐつをはき、顔が垢で汚れていても洗わず、畿湖（京畿道、忠清道）、関東（江原道）地方を歩き来している。奇抜な詩を書き、科体詩を作らせると、とても巧みであった。人々は彼が来ることを嫌がらず、いつも食事を出し宿を提供しては引き止めた。ときに難しい韻や詩題を彼に押しつけたが、その詩の押韻には無理がなく、文章がとてもものびやかであった。また、韻を出すと、すぐさま応答し、詰まるところがなかったので彼の名声は大変高かった。人々は彼を姓だけ呼び、笠をかぶるのを好んだところから金臺笠と呼ぶようになった。

私は江原道へ行ったときにその詩を見たことがあるが、村の書堂の間では、冠童が金臺笠のことを熱心に語り、その詩を朗読し、あたかも昔の偉い人に対するようであった。ある者は彼の詩をひもとき、ある者は筆写して手本としていた。また、彼には次のような話も伝わる。よく科挙

の試験場に行って、あるときは数十篇の詩を立ちどころに作ったかと思うと、あるときは一篇も作らずに出てきた。まさに狂人の如くであった。金を使うことがなかったので、人々はことさら援助することもしなかった。

また白日場や科挙の試験場に入入りしては、よく酒を飲み、酔いから醒めることがなかったという。その酒代は、みな畿湖、関東地方の人たちが出し合った。試験場の外の酒屋でも彼は人気者で、同時にその狂気を恐れて、酒に爛をつけて出して酒代を求めることがなかったという。

彼は寒いときも暑いときもつねに、白い袷を身につけて歩いていたが、ときたま親切な人が新しい綿衣を贈ると遠慮せずにもらって着た。そして、いままで着ていた袷はたたんで肩に背負って行きながら、路上で寒さに凍えている人に出会うと、着ていたその新しい綿衣を脱いで与え、自分は再びもとの袷を着て、風雪にひるむことがなかった。衣服に虱が這っていても一向に気にせず、豪放磊落にふるまった。

私はこの不思議な人物について聞いて久しいが、その名前を聞くこともなく、どこに住んでいるのかを詳しく知りたいと思わなかった。何故かといえば、人の名声というものは名前や住んでいるところとは関係がないからだ。

今年の春、私は鬱を病んで清涼寺に静養に来た。そこでたまたま、田舎から出て来た楽峰李尚祐と会った。彼と韻を決めて詩作をしていたとき、楽峰が私に「君は金臺笠を知っているか」と聞いたので、私は「その名を聞いて久しい」と答えた。楽峰は続けて「龍仁のある村の家で、たまたま金臺笠が来て宿泊し、鉢を打ちながら詩を作っているのに出くわした。ころみに彼と話したが、そのおり金臺笠は自分からこんな話をした。——若い頃、ソウルに遊んで詩文の勉強をしたが、そのときは進んでソウルの詩人、名士たちと交わり互いに打ち解けた。なかでも、安福卿膺寿と申士綏錫禧は才能があって同じ詩社で名声が高かった。彼らとますます厚く交際し、丁重に扱われたので私はこれを嬉しく思った。ところが、後に私が広州の郷品であることを知ってから待遇が粗略になった。私もこの兩人に受け入れられないと知った以上、彼らの後について名を上げることを諦めるしかなかった。それからは何をしても憂鬱で楽しくなく、とうとう狂ってしまった。こうして落魄不遇、勝手気ままに放浪するようになったのだ。私の病気は福卿と士綏に原因があるのだ。——。

そして嘆きながら——今や相手は公州の長官や集賢殿校理という身分の高い人だ。会うことなど出来ないじゃないか——と言った。彼の住まいは広州で、またの名を金鑾と言っていた。」

〔中略〕

今も、その行動が荒れていて落ち着かないと聞く。その詩の数は多いが、いささか偏っており、奇抜だが、幾分典雅さを欠いている。恐らくその病気が治らないせいで才能が抑えられているのであろう。まことに惜しく、嘆かわしい。

ああ、而鳴は、例え兩人（福卿と士綏）に辛く当たられたとしても穏忍し、食客ぐらしを続け、詩文の成就に専念していたら、その成果は計り知れないものがあつた筈だ。兩人は才能を愛し、人に対する礼儀を知っている人間である。どうして取るに足らない氏族だといって薄遇するだろうか。思うに、而鳴の病気は薄遇されたからではなく、薄遇されたと思ひこんでしまったところからきたのだろう。もし、而鳴が、ずっと安福卿のところに食客でいて、士綏らと交際を続け、詩社で名を上げていたら、成就したものがどれだけ大きかったことだろう。今のように畿湖、関東地方でその詩が愛唱され、その顔が見られなくなることを心配し、彼が現れると欣喜雀躍し、競って酒食でもって引き止め、立ち去ることを恐れるような今日のような姿にはならなかっただ

ろう。

大丈夫たるものが名を世の中に上げるのは、もとより道が一つしかないわけではない。而鳴の名がこのように広まっているのだから、何も福卿と士綏が薄情だったことを恨むこともあるまい。私がこのように金臺笠のことを記したものを畿湖、関東地方の而鳴がよく往来するところに置くのは、而鳴に一読してもらい、その心を穏やかにさせ、気持ちを変えてもらいたいと思うからである。速やかにこのことを悟り、神業のような詩を作ってその名を轟かされよ。壬子初春、申錫愚記す。】

金笠の本名は炳淵で、彼は朝鮮で勢道政治を行った安東金氏の一門に生まれたという。安東金氏は朝鮮王朝末期に勢道政治を行った有名な兩班家門である。宣川府使であった祖父の金益淳は洪景来の乱の時に平安道の宣川で降伏した。朝廷は金益淳を処刑し、一家に対して「滅門廢族」という処分を行ったという。洪景来の乱とは、1812年に起きた農民反乱で、平安道農民戦争ともいう。中心人物の洪景来（1780～1812）は没落兩班の末裔である。平安道は清と国境を接する地であったので、清との貿易によって商品経済が発達し、富商や富農が台頭した反面、兩班や農民の没落がみられ、また、中央政府と地方官による収奪も強かった。それとともに平安道は当時の朝鮮では地域的に差別されていて、この地の兩班は中央では出世できなかった。これらに対する不満が爆発したのが洪景来の乱である。地方官の排除、さらには中央政府の打倒を目ざしたが、同年の定州の戦いにおいて鎮圧された。しかしこの反乱は十九世紀後半に激化する民乱の先駆となったといわれる。農民蜂起軍の占領地は嘉山以西の博川→郭山→泰川→定州→宣川→鉄山→龍川といわれる。金笠の祖父の益淳の記事は『朝鮮王朝実録』から確認でき、1812年3月9日記事に「謀叛罪人益淳伏誅」（『朝鮮王朝実録』純祖 15 卷⁽³⁾）とあり、蜂起軍に降伏した彼を謀反の罪人として処刑した。『大東奇聞』では、金笠が自ら罪人の子孫として、笠を被り敢えて天を仰ぎ見ることはなかったと伝える。『海蔵集』では、彼が詩を得意としたこと、よく科挙の試験場に入出入りしたこと、また彼がソウルの詩人、名士たちと交わり、特に安福卿と申士綏と厚く交際したことなどを細かく記している。作者申錫愚は最後に、金笠が安福卿のところへ食客でいて、士綏らと交際を続け、詩社で名を上げていたら、もっと成功しただろうと嘆いている。また「彼はよく巧みな詩を作り、奇抜な詩を書き、科体詩を作らせると、とても巧みであった。人々は彼が来ることを嫌がらず、いつも食事を出し宿を提供しては引き止めた。」とあるように、彼にとって詩の創作は生活を維持する唯一の手段であったと思われる。金笠の「還甲宴」「贈還甲宴老人」「与詩客詰語」「妓生との合作」などの作品からも、人の還暦の宴や詩会、妓楼などのところで詩を作って、食事を提供してもらったことが窺える。そして金笠がソウルの詩人や名士たちと交際し詩社に参加し、また食客としていたことから、彼にはやはり地方の兩班として自負があった或いはソウルの名士に取り入り生活をしようとしたなどと考えられるが、李応洙氏はソウル兩班の庇護によって廢族の特赦を得、科挙に応じ、兩班の身分の回復をはかったのではないかと述べる⁽⁴⁾。金笠が科挙の勉強に励んだことは事実で、また『海蔵集』の記録と合わせて考えれば、李氏の説は説得力はある。金笠が残した作品には兩班を批判するものが多くあるが、その感情は当初からあったものではなく、放浪生活の中で徐々に形成されたものであったと思われる。以上のように同時代の文献は金笠の出自と生活の一面を伝えているが、ここから彼の旅の全体像を把握することはできなく、やはり作品をひもとかなければならない。

三 金笠の旅

金笠が詩、特に科詩（科挙に応試する時に書く詩）を得意とすることは『海蔵集』にも記されており、おそらく小さい時から科挙の勉強に励んだと思われる。彼は「鄭嘉山の忠節の死を論じ、金益淳の罪、天に通じるを嘆く」という科詩を残している。これは金笠が二十歳の時に、寧越で開かれた白日場の試験で首席合格したときの作品だと一般に言われる。金笠は洪景来の乱で降伏した金益淳が自分の祖父とは知らず、罪を糾弾した。その直後母から自分の祖父であることや家庭の秘密を知り、「滅門廢族」の子孫である衝撃や絶望から放浪の旅に出たと一般に言われる。「滅門廢族」の子孫は官職に就くことができないという。金笠が旅に出た理由について、金思燁氏は「彼は成長すると鬱憤に堪えず、笠を深く被って各地を放浪しながら破格の字戯を弄した詩を作って、自分に辛く当たった人や官吏、兩班の横暴などを嘲弄した⁽⁵⁾」と、鬱憤に堪えられなかったからだとしている。今村与志雄氏は「金笠が、兩班儒生としての身分を回復するためには、どうしても科挙の関門を通過しなければならなかった。国王に忠をつくすことがタテマエであるから、彼の場合、祖父金益淳を筆誅せねばならなかった。だが、そうすると、祖父に対する孝は成立しなくなる。その矛盾は、…金笠にとって深刻なものであったといってよい。…やはり兩班からまったく脱け出す以外すべはなかったのである⁽⁶⁾。」と述べ、崔碩義氏は「金笠は廢族の子孫として世の中から受ける迫害と蔑視に耐えられず、またそれ以上に立身出世の道を閉ざされたことに絶望したのであろう。それなら一層のこと、詩文の才能を生かして口過ぎしながら、気ままに諸国を放浪するのもいいではないかと考えたのかも知れない。そう考えた瞬間から、彼は世間並みの人生を捨てたのである⁽⁷⁾。」と述べる。金笠は祖父を誹謗したわけで、儒教社会の朝鮮時代から見れば最も不孝者である。その儒教社会に生きて科挙のために、四書五経など主に儒教的な規範を勉強して来た彼にとっては「不孝」というものは耐えられなかったのではないとも思われる。このように、金笠は出世と身分回復への絶望、祖父を誹謗した自分の情けなさなどが重なって旅に出たと思われ、彼の旅の動機は個人的な感情から出発したものと思われる。

金笠が放浪の旅に出て立ち寄った場所は、残された作品からある程度知ることができる。以下詩に詠まれた地名をあげる（「」は詩題）。

・咸鏡道

吉州（「吉州明川」）、明川（「吉州明川」）、樂民樓（「樂民樓」）、咸興（「咸興興九天閣」）、咸関嶺（「咸関嶺」）、安辺老姑峰（「安辺老姑峰過次吟」）、安辺飄然亭（「安辺飄然亭」「安辺登飄然亭」）

・平安道

安樂（「過安樂見忤」）、東林山（「辱尹哥村」）、大同江（「大同江上」「大同江練光亭」）、馬島（「馬島」）、龍湾（「馬島」）、平壤（「大同江練光亭」「浮碧樓吟」「平壤妓生との合作」）、清川江（「登百祥樓」）、安州百祥（「登百吉祥樓」）、密城（「登百吉祥樓」）、妙香山（「妙香山詩」）

・黄海道

九月山（「九月山峰」）

・江原道

金剛山（「金剛山」「金剛山」「金剛山詩」「入金剛」「金剛山」「金剛山」「入金剛山」「金剛山景」「答僧金剛山詩」「金剛山」「金剛山」「詩僧との共吟」）、鶴城（「鶴城訪美人不見」「鶴城風景二十韻」）、淮陽（「淮陽過次」）、春川（「自京城至春川道中」）

・京畿道

長湍（「過長湍」）、楊州（「嘲山村学長」）、広灘（「過広灘」）、開城（「開城人逐客詩」「開城觀徳亭吟」「開城」）、京城（「自京城至春川道中」）

・忠清道

魯城（「老総角陳情表」）、扶余（「扶余妓生との共作詩」）、白馬江（「扶余妓生との共作詩」）

・慶尚道

晋州（「元堂里」「矗石楼」）嶺南（「嶺南述懐」）

・全羅道

沃溝（「沃溝金進士」）、広寒楼（「登広寒楼」）、全州（「煙竹」）、宝林寺（「過宝林詩」）、龍泉（「過宝林」⁽⁸⁾）

詩に詠まれた地名から辿って見ると、金笠は朝鮮半島全国を放浪したことがわかる。崔碩義氏は「金笠が平安道をどんな順序で回ったか、そのくわしい行跡はわからない。ただ、いえることは、洪景来の乱の舞台になった嘉山、博川、泰川、定州、宣川の各地には行っただろうと考えられる⁽⁹⁾」と、平安道では洪景来の乱の道を通ったと予想している。金笠がいつどんな順序で全国を旅したかは、具体的に知るよしもないが、生涯を放浪して過ごしたことは晩年の作「蘭阜平生詩」から確認できる。

鳥巢獸穴皆有居	鳥には巢、獸には穴、みんな住居がある
顧我平生独自傷	私は自分の一生を振り返って独り感傷に浸っている
芒鞋竹杖路千里	わらぐつと竹杖で千里の道を放浪し
水性雲心家四方	行く雲と流れる水の心で、いたるところをわが家としてきた
尤人不可怨天難	人を咎めることはよくないし、天を怨んでもならない
歳暮悲懷余寸腸	だが、年老いて悲しい思いが腹わたに沁みる
初年自謂得楽地	思えば幼かったころは楽しいところで育った
漢北知吾生長郷	漢江の北の地こそ私の生まれたふるさと
簪纓先世富貴人	名門の出である先代は富貴の人であり
花柳長安名勝庄	華やかな都においても名勝の地に住んでいた
隣人也賀弄璋慶	隣人たちも家門に男子が生まれたことを祝ってくれ
早晚前期冠蓋場	遅かれ早かれ出世することを早くから期待した
髮毛稍長命漸奇	髪の毛が幾らかのびたころから運命はしだいに奇怪になり
灰劫殘門翻海桑	家屋敷は焼かれて跡形もなくなり、状況は一変した
依無親戚世情薄	頼るべき親戚もなく世間もまた薄情で
哭尽爺孃家事荒	父と母をなくして慟哭し、一家は没落した
終南曉鐘一納履	南山の曉の鐘を聞いて、ひとたび草鞋をはき
風土東邦心細量	この東邦の風土を心細かくはかり
心猶異域首丘狐	異郷にあっても心はいつも故郷を向いた狐のごとく
勢亦窮途触藩羊	進退窮まったそのごまは藩に角を引っかけた羊であった
南州従古過客多	南の国には昔から旅人の姿が多く
転逢浮萍経幾霜	浮き草のようにさまよって、いや幾歳になるのか
搖頭行勢豈本習	他人に頭を下げて歩く世渡りがどうして私の本来の習性であろう
挈口凶生惟所長	だが乞食渡世がもっぱら得意になってしまった

光陰漸向此中失	月日はこうしているうちにも過ぎていき
三角青山何渺茫	青い三角山は、なんとほかに霞んでいることか
江山乞号慣千門	三千里江山に乞食を名乗って多くの家の門前に立つのに慣れたが
風月行装空一囊	風月を楽しむ旅じたくは空っぽの袋のみだ
千金之子万石君	かずかずの金持ちや財産家を訪ね
厚薄家風均試嘗	人情の厚い家風、薄い家風をひとしく味わった
身窮每遇俗眼白	身は落ちぶれて、いつも俗人から白い目で見られ
歳去偏傷鬢髮蒼	歳月は流れ、髪の毛は白くなっていくのがひとえに悲しい
帰兮亦難佇亦難	帰るのも難しく、さりとて立ちどまるのも難しい
幾日彷徨中路傍	どれほどの日を路傍にてさすらうことだろう ⁽¹⁰⁾

これは晩年になって自分の生涯を回顧した詩である。ここでは漢江の北の地が故郷で、名門の家で生まれたこと、一家が没落したこと、乞食を名乗って浮浪の生活を過ごし、世の人情の厚薄を味わったことを詠み、最後に故郷に帰るのも難しく、立ち止まるのも難しく、路傍で彷徨う自分の人生を嘆いている。また詩の「芒鞋竹杖」からは、笠を被り、藁靴を履き竹杖を持つ金笠の姿が思い浮かぶ。朝鮮時代では、笠は僧侶や罪人、喪を服す人が被るものとされている。金笠が笠を被ることについて、『大東奇聞』は罪人の意識からだとしているが、本当に罪人の意識からか、或いは世俗を捨てた意味なのか、真意ははかりかねる。

四 金笠と金剛山

金笠は金剛山の詩を 12 首も残しており、彼にとって特別な場所であったと考えられる。黄五の『緑此集』「金莎笠伝」に次のようにある。

金莎笠者 東海上人也 金 其氏 莎笠 以頭上所着者 言也 乙巳冬 余食于長安 旅次 一日雨田鄭頭徳 送余書曰 天下奇男子在此 蓋往見之 果莎笠也 人也好飲 酒喜狂謔 善為詩 酒酣 往往欲大哭之 平生不作舉子業 蓋畸人也 夜深 蹴余曰 爾見金剛者乎 余曰 金剛勝地也 余夢寐中常有金剛 姑不見也 笠瞋目而視曰 吾每歳必見金剛 或春見之 秋亦見

【金莎笠という人は江原道の人で、金がその姓で、莎笠をかぶっていたからそう呼んだ。乙巳年（一八四五年）の冬、わたしが旅先のソウルに逗留していたある日、雨田鄭頭徳が手紙で「天下の奇男子がここに来ている」と書いてくれた。行ってみると、やはりその人が莎笠であった。彼は酒と諧謔を好み、詩をよくした。そして酒に酔うとよく大声で泣いた。彼は生涯科挙を受けず職業にもつかなかった。たぶん奇人であろう。夜中に私の足を蹴り「君は金剛山に行って見たかね」といった。わたしは「金剛山はすばらしいところだと聞いて夢にまで見るが、まだ行って見たことはない」と答えた。すると、彼は目をつりあげて、じっとわたしを見ながら「わたしは毎年、必ず金剛山を見ている。ときには春に見て、秋にも行って見る」と言った。】

作者は金笠について、酒と諧謔を好み、詩をよくし、奇人であると評する。そして二人の会話の記録からは、金笠が毎年必ず金剛山を訪ねたことが知られる。金剛山は今日でも有名な景勝地である。季節によって呼び名が変わり、春は金剛山、夏は蓬萊山、秋は楓岳山、冬は皆骨山と呼ばれる。「金剛」

は『華嚴經』の中から採った名称であるといわれる。では、李朝時代において金剛山は一体どんなところであったかを見てみたい。

『世宗実録』地理志には「金剛山、在長楊縣東三十里許、一云楓岳、或稱皆骨、海東山水名於天下、此山千峯雪立、高峻奇絶、又爲之冠。且以佛書有曇無竭菩薩所住之説、世遂謂人間淨土、諺傳中國人亦云：“願生高麗國親見之。”⁽¹¹⁾」とあり、金剛山は楓岳山または皆骨山といわれ、仏書に曇無竭菩薩が居住したところとあるから人間の浄土と呼ばれ、中国の人が高麗国に生まれて金剛山を見たいと願う諺が伝わるほど、中国の人にも有名だったことを記している。金剛山には有名な寺刹が多くあり、また仏教的な山であったから、朝鮮時代には多くの僧侶たちが金剛山に入り修行したといわれる⁽¹²⁾。周知の通り、李氏朝鮮は創立してから、揚儒排仏の政策を打ち出し、仏教に弾圧を加えてきた。世宗の時には、僧侶が京都市内に自由に出入りすることを禁ずるに至り（『世宗実録』）、顕宗は人民の出家を禁じ、僧の還俗を命ずるといふ仏教絶滅策を取るに至った（『顕宗実録』）。しかし、金剛山の寺院は例外的に朝廷の庇護を受けてきた。こうした記事は『朝鮮王朝実録』に多く見られる。たとえば李朝初期に寺院整理の政策の時にも多くの寺は土地を没収されたり奴婢の数を減らされたりしたが、金剛山の表訓寺、楡帖寺は没収されることなくかえって柴地を与えられたという（『太宗実録』）。また世祖は楡帖寺を王室の福を祈る願堂とし、金剛山の長安寺、正陽寺、表訓寺に行幸し、米三石などを金剛山の諸寺に施したとある（『世祖実録』）。世祖は朝鮮王の中で唯一金剛山に行幸した王でもある。肅宗は金剛山の楡帖寺に別殿を設置して仁祖、顕宗の影幀を奉安して春秋に祭祀を行ったとある（『肅宗実録』）。正祖の時には、世祖大王の位牌を奉安した金剛山の表訓寺の願堂を修理すべきだという記事がある（『正祖実録』）。このように、李朝時代の抑仏政策の時にも金剛山の寺院は王室の願堂として存在し、王室に守られたことが知られる。『朝鮮王朝実録』には中国の使臣たちが金剛山に行ったことが多く記されており、彼らの目的は観光か仏教的な法事にあったと推測される。『太宗実録』には左通政趙居任が明の使臣になぜ金剛山を見に行くかと聞いたら、明の使臣は「金剛山形如佛像、故欲見之。」と答えたとあり、ここからも金剛山が仏教的な山として広く知られたことがわかる。朝鮮の王室としてはこうした中国との外交のことを考慮しても、金剛山の諸寺を保護せざるをえなかったのではないかと考える。金笠は一体何を求めて景勝地でありながら仏教的な山である金剛山を毎年訪ねたのか。彼には「松松柏柏岩岩廻 水水山山処処奇」（「金剛山」）のような、水と山が多く到るところがすべてすばらしいと景色を称える詩もあれば、次のような詩もある。

「金剛山」

江湖浪跡又逢秋	世の中を放浪しているうちにまた秋になったので
約伴詩朋会寺樓	詩友と約束して寺樓で会った
小洞人来流水暗	小さな洞穴に人が来ると流れる水が翳り
古龕僧去白雲浮	古い仏塔の前を僧が通ると白雲が浮かぶ
薄遊小答三生願	いささか遊んだので三生の願いは少しは叶えられ
豪飲能消万種愁	気風よく酒を飲むとさまざまの憂いが消えた
擬把清懷書柿葉	私のこのようなすがすがしい思いを柿の葉に書きとめて
臥聽西園雨声幽	西園に横たわりひそやかな雨の音を聴く

「答僧金剛山詩」

僧

百尺丹岩桂樹下	百尺をこす赤い岩に生えている桂の樹の下
柴門久不問人開	寺の門は久しく訪れる人がいなくて閉まっている
今朝忽遇詩仙過	今朝にわかにかここを通る詩仙に遇ったので
喚鶴看庵乞句來	鶴を呼んで草庵の番をさせ詩句を請うために来ました
金笠	
羸羸尖尖怪怪奇	高く聳え鋭くどがった山容はまさに奇々怪々で
人仙神仏共堪疑	人も仙人も神や仏であってもみな怪しみ恐れるだろう
平生詩為金剛惜	一生、金剛山のために詩を書こうと力を惜しんできたのに
及到金剛不敢詩	いざ金剛山に来てみるとどうしてもその詩が出てこない

「入金剛山」

書為白髮劍斜陽	詩を書いて白髪になり気概も衰え
天地無窮一恨長	あるのは天地無窮の深い悲しみだけだ
痛飲長安紅十斗	都にて濁り酒を浴びるように飲み
秋風簑笠入金剛	秋風とともに簑笠で金剛山にやってきた

一首目は秋に訪ねた時の詩である。「約伴詩朋会寺樓」とあるから、寺では詩会が催されたと推測される。詩友は僧侶かあるいは詩会に参加した文人墨客であろう。二首目は僧に答える金剛山詩であり、僧と金笠が問答の形式で詠まれている。僧が詩仙である金笠の詩一句を請うために来たことと詠むのに対して、金笠は金剛山のために精進して来たが、その絶景に圧倒されて詩が出てこないと嘆く。僧が金笠を詩仙というのは、金笠の名が世間に知れ渡ったことを意味する。三首目は天地無窮の深い悲しみを晴らすように酒を飲み、金剛山にやってきたことを詠む。金笠はほかに「金剛山立石峰下庵子 詩僧との共吟」の作を残しており、金剛山の僧侶と交流があったことが認められる。李朝は創立してから排仏政策を貫いて、17世紀には人民の出家を禁じ、僧の還俗を命ずるという仏教絶滅策を取るにいたり、この時にわずかに残った僧は山間の草庵に隠棲し、ひたすら読経勤行と詩文の玩弄に独善するようになり、また破衣の身を一杖に托して鶏林八道を東西南北に雲水のように行脚しまわる風も盛んで、彼らは地方の文人墨客とも交わったといわれる⁽¹³⁾。金剛山には寺が多くあり、詩を得意とした僧侶も多かったであろう。金笠が金剛山を訪ねるのは遊覧の目的もあるが、詩を作る場と酒食を提供してくれる場があったからではないだろうか。金剛山は仏教の聖地であるが、その前に朝鮮を代表する景勝地としてある。そのため、無信仰の探勝の客が絶えなかったはずである。特に現に残されている朝鮮時代の金剛山に関する紀行文や山水画などからは、文人墨客が多く訪れたことが知られる。こうした文人や僧侶、いわゆる漢詩を作る階層の人が集まるところに詩会も催されたのであろう。金笠は一首目の「金剛山」詩で金剛山で遊び三生の願いが少し叶えられたと詠む。金笠は「妙香山詩」でも、「平生所欲者何求 每擬妙香山一遊」と生涯の願望が何に求めるかと問われたら、その度に妙香山に一度遊びたいといったものだ⁽¹⁴⁾と詠む。金剛山も妙香山も朝鮮名山の一つである。李朝時代は、東の金剛山、南の地異山、西の九月山、北の妙香山を四大名山と呼んだ。金笠は「昨年九月過九月 今年九月過九月 今年九月過九月 九月山光長九月」と九月山を詠んだ詩を残しており、九月山にも到ったことが知られる。この詩は九月山という山の名と季節の九月を交互に詠み込み、戯れの詩である。南の地異山に行ったかどうかは確認できないが、彼が朝鮮の名山を踏破したことは十分窺えよう。金笠は「雑詠」で、

静処門扉着我身	静かな僧堂にわが身をおくと
賞心喜事任清真	風流を愛でる喜びで心が清らかになるようだ
孤峰罷霞擎初月	霞がかかった山の峰に三日月が浮かび
老樹開花作晩春	老樹は花を咲かせて晩春を楽しんでいる
酒逢好友惟無量	酒はよき友に逢うといくらでも飲むことができるし
詩到名山輒有神	詩は名山にやって来て作ると神妙にひびく
靈境不須求物外	仙界を必ずしも世間の外に求めることはない
世人自是少閑人	世人も自然に少し風流味をおびるものだ

のように詠む。「詩到名山輒有神 靈境不須求物外」とあるように、金笠にとって名山は最高の詩作の場であり、俗世を離れたところであったと考えられ、金剛山を毎年訪れるのも詩の素材、詩作の場、脱俗を求めることにあったのである。こうしたことは次の「過宝林詩」にもよく表れていると思われる。

窮達在天豈易求	貧窮と栄達は天命だからどうしてたやすく得られようか
従吾所好任悠悠	私は自分の好きなように悠々と生きてきた
家郷北望雲千里	家郷のある北を望むと遙か千里の雲のかなた
身勢南遊海一漚	私の身の上は南の海に漂う一羽の鷗のようだ
掃去愁城盃作箒	酒の盃を箒に見立てて積もった愁いを掃き捨て
釣来詩句月為鉤	月を釣鉤にして詩句をひねり出す
宝林看尽龍泉又	宝林寺を見終え龍泉寺に来ると
物外閑跡共比丘	俗世を離れた静かなところで仏僧のようになった

宝林寺の名は各地にあるといわれ、これは「全羅南道長興郡有治面にある⁽¹⁴⁾」といわれる。この詩では、自分は悠々と生きて来たと言いつつも、愁いを酒で晴らしたいと詠み、不遇な人生を吐露する。金笠は「自詠」で「詩酒自娛身」と詠み、酒と詩作は身を楽しませて鬱憤を晴らすものと詠んでいる。「過宝林詩」にも酒を飲み詩句をひねり出したいと詠んでいる。詩の最後に「物外閑跡共比丘」と、俗世を離れた寺で比丘のようになったと詠むが、これこそ彼が求めた境地ではないだろうか。金笠の作品に仏教思想が色濃く表れているのは「断句一句」の「万事皆有定 浮世空自忙」がある程度で、決して多くなく、勿論仏教に皈依したとも言えないが、名山や寺に立ち寄ることからは精神的な救いを仏教に求めようとしたのではないと思われる。江田俊雄氏は朝鮮仏教の特徴の一つとして「寺院の伽藍の位置からそれは山林的であり、観光的である」ことをあげて、「天下の奇勝金剛山の万二千峰の名は、皆諸仏諸菩薩の名が冠せられ、全山が修養道場でもあった⁽¹⁵⁾」と述べており、金笠が金剛山に拘るのは精神修養のためであったと考えられる。

五 おわりに

金笠の詩は諷刺詩・山水風物詩・人生詩・恋愛詩・詠物詩・科詩・破格詩・諺文詩などと、そのジャンルは幅広く、内容も両班貴族や社会の人情を諷刺する詩、わざと漢詩の決まりを破る破格の詩やい

は漢文とハングルを混ぜた諺文詩などと様々である。『海蔵集』では「如癡如狂」、『緑此集』では「天下奇男子」と評しているが、こうした奇怪な行動、狂人ぶりも社会への反発或いは世俗を捨てたことを表しているのではないかと思われる。しかし政治、社会制度への反発の心は放浪の旅生活の過程で、庶民の悲惨な生活を見て募ったものであろう。金笠は立身出世と身分回復への絶望、祖父を誹謗した自分の情けなさなどが重なって、旅に出たと考えられる。金笠にとって鬱憤を晴らしてくれるのは酒と詩作にあるが、その詩作の場を提供し、作品を披露する場になっているのが旅であったのであろう。金笠は毎年金剛山へ行くといわれる。金剛山は朝鮮を代表する名山で景勝地でありながら、仏教の聖地でもあった。金笠の作品からも金剛山の旅は遊覧、詩会、精神的な救いを目的としたと考えられる。金笠の作品に仏教思想の影響は認めにくく、まして仏教に帰依したわけでもない。科挙のために勉強してきた金笠の思想は儒教的なものであるが、現実から逃れて精神的な解脱を願う時に、一方にあったのが仏教であったのであり、それが金剛山の旅へとつながったと考えられる。金笠はなぜ生涯放浪の旅を続けたのか、彼にとって放浪とは一体何であったかなどについては、今後のさらなる課題としたい。

注

- 1 李応洙編 大増補版『金笠詩集』（1941年初版発行、1953年日本啓明出版社再版発行）。
- 2 『大東奇聞』『緑此集』『海蔵集』の本文及び訳は崔碩義編訳注『金笠詩選』（平凡社、2003年）による。
- 3 『朝鮮王朝実録』データベース (<http://sillok.history.go.kr>) による。以下同じ。
- 4 注1。
- 5 金思燁『朝鮮文学史』（金沢文庫、1973年）。
- 6 今村与志雄『歴史と文学の諸相—朝鮮・ヴェトナム・中国』（勁草書房、1976年）。
- 7 崔碩義編訳注『金笠詩選』（平凡社、2003年）。
- 8 李応洙編 大増補版『金笠詩集』（啓明出版社、1953年）と崔碩義編訳注『金笠詩選』（平凡社、2003年）をテキストとした。
- 9 崔碩義『放浪の天才詩人金笠』（集英社、2001年）。
- 10 詩と訳は崔碩義編訳注『金笠詩選』（平凡社、2003年）による。以下同じ。
- 11 注3。
- 12 高橋亨『李朝仏教』（宝文館、1929年）。
- 13 江田俊雄『朝鮮仏教史の研究』（国書刊行会、1977年）。
- 14 注7。
- 15 注13。